

11～13世紀東アラブ諸都市における説教師の活動と言説の比較にむけて	
村山 さえ子	比較社会文化学専攻
期間	2008年1月13日～2008年2月1日
場所	エジプト・アラブ共和国
施設	1月13日～17日 カイロ、エジプト国立図書館・写本閲覧室 1月18日～20日 アレクサンドリア アレクサンドリア図書館・写本センター ¹ 、稀観本部門 1月21日～31日 カイロ アラブ連盟大学写本研究所、エジプト国立図書館・写本閲覧室、 フランス東洋考古学研究所、カイロ国際ブックフェア

1. はじめに（研究テーマとこれまでの成果）

筆者は11～13世紀の東アラブ（現在のイラクからシリア、レバノン、パレスチナ、エジプトなどの地域）の諸都市について、多様な社会層を含め都市全体を総合的かつイキイキと捉え、都市による比較を行い、当該時代の特徴を明らかにすることを目指している。そのための手段として、権力者、軍人、知識人、民衆といった異なる社会階層に属する人々が一堂に会することがあった「説教」、それを行う「説教師」をキーワードに調査研究を進めている。

当該地域での主要言語であるアラビア語には「説教」に相当する語彙は複数ある。フトバ、ワアズ、キッサ、タズキールについてなどがそれである。フトバは金曜日の正午の集団礼拝など定められた時に行なわれた。その際にまず神を讃え、預言者へ神の祝福が求められることに加え、その時々支配者への神の祝福が求められることがあった。フトバは細部にわたり定型化されていることに加え、その中で名を読み上げられることが、その地域における支配者の支配を承認したことを意味した。このため、年代記などの史料中のフトバに関する記述は「説教」の内容ではなく、誰の名がどの都市の会衆モスクで読み上げられたかに集中している。ワアズはこれとは異なり、支配者の御前から知識人らの座会、市井の人々の集いなどさまざまな場所で行なわれた。語り手は人々の心に神への畏れを喚起し、理想となるムスリムの姿を示すような教訓的、諷刺的内容を、心の底から語ることが求められた。これに対し、神を讃えることを主眼とする「説教」はタズキールとして区別して定義される。キッサは時代によってその意味範疇が大きく変わる。研究対象とし

ている11～13世紀に関していえば、『諸預言者伝 Qisas al-anbiya'』などの慣用的な用法を除けば、学問上の価値とは関係のない物語、語り物として扱われている。

「説教師」に関する先行研究は、これらの語彙の区分をあまり考慮せず、通史的にあるいは広域に論じてきた。[Pedersen1948]は預言者時代以降19世紀までの多様な「説教師」を通史的に、[Pedersen1953]では「自由な「説教師」 free preacher」に向けられた批判をとりあげ、法学やハディース（預言者の言行・規範）の講義では満足しない人々は、より感情的な体験を求め「説教師」の情緒的な語りを求めていったとする。また、同じく説教集のテキストや論争書に基づいた[Berkey2001]はウラマー間で起こった「説教師」をめぐる議論に注目し、知の担い手であるウラマーたちの関心の所在とその背景にある宗教的権威の問題について論じた刺激的な研究である。しかしながら、これらの研究はいずれも地域や時代の差異についてはあまり関心を払っておらず、「説教師」らの行動についても具体的な事例への立ち入った検討が不足している。

筆者は11～13世紀のバグダードに関して、いつ、どこで、どのような知的社会的背景を持つ人物がワアズを行なったのかを、年代記、伝記集、地誌を含めた多様な史料から事例を収集し、仔細に検討した。その結果、その時々社会や政治の動向を反映してワアズらの行動も変化し、その逆に彼らと市井の人々との関わり方や権力者らの動静にも影響していたことを修士論文で明らかにしてきた。社会・教育施設とその背景を補いつつ、学術誌に投稿すると共に、今後はアレppo、ダマスクス、カイロの事例と比較し、それぞれの都市

における差異について検討していくことを計画している。

2. 現地史料調査および収集の目的

修士論文ではワズとワーイズに注目してきたが、今後はハティーブも含め「説教師」についても検討の対象とする。以下、本報告中は煩雑になることを避けるため、特に断りがない場合を除き「説教」はフトバとワズを、「説教師」はハティーブとワーイズを指すものとする。

先に述べたように、これまでは「説教師」の行動に注目し、「説教」の内容についてはいつ、どこで話されたものであるかの裏づけが取れない説教集については検討の対象外としてきた。しかし、先行研究に当たる中で、西洋中世史において説教研究は「国際中世説教研究学会」が隔年開催され、専門雑誌があるほどの厚みがあることを知った。特に13～15世紀の膨大な説教写本を手がかりとして、説教の執筆と実践を体系的に支援するシステムがあったこと、当時の説教には地域を越えてある一定の均質性があったことを明らかにしている²。

これらは筆者が検討対象としている時代とも重なり、また、いわゆる十字軍に関わる説教についても西洋史の分野で複数の研究がある³。イスラーム中世史研究の分野では、「説教集」を用いた先行研究はあるが、執筆された「説教集」と「説教」の実践の双方について立ち入った研究はない。西洋史における研究動向を鑑み、新たに「説教集」についての史料収集に着手することを、今回の調査の目的のひとつとした。組織化されたキリスト教会の托鉢修道士と、いわゆる教会組織のない中東地域の知識人の活動を単純に比較することはできないが、今後は西洋史での成果を参考に、「説教集」の収集とその中で展開される言説に着目し、東アラブ世界における「説教」の特質について研究を進めるものとする。

以上の点を踏まえ、本調査の主な目的は、①筆者未見の未校訂の写本、あるいは校訂本の底本となった写本を閲覧し、必要部分を複写してくること、②写本、校訂本を問わず「説教集」の収集に着手することである。

3. 調査の概要と成果

筆者が出発する直前に、主たる調査対象として予定していたアラブ連盟大学写本研究所（以下、写本研）が内部の改築工事のために2週間の予定で閉鎖中であるという情報が入った。予告通りであれば、現地滞在

中に再開されるため、予定していた機関の訪問の順序を入れ替えればよい。しかしながら、エジプトに限らず、中東諸国で「ボクラ（明日）」といわれて、その言葉通り翌日に実行されることは非常に稀で、2週間で再開するかどうかは不確定であった。このためエジプト国内で比較的写本にアクセスしやすく、筆者が必要とする写本を所蔵していることが分かっているアレクサンドリア図書館の写本部門を調査先として急速追加した。以下、調査した機関ごとに概要と成果をまとめる。

①エジプト国立図書館・写本閲覧室Dār al-Kutub, al-Qawmiya, Qism al-Makhtūtāt

まず写本マイクロフィルムを見るまでもっとも時間がかかるエジプト国立図書館（以下、国立図書館）の写本閲覧室を訪れた。国立図書館の開館日は土曜日から木曜日まで、開館時間は9時から19時30分までであるが、写本閲覧室は日曜日から木曜日まで、開室時間は9時から14時までとなっている。パスポートを預け、必要事項を記入する以外、特に複雑な手続きはない。しかしながら、写本閲覧室に入ってから技術と根気を要する。

写本マイクロフィルム閲覧の手続きは以下の通りである。①あらかじめ目的の写本マイクロフィルムのタイトルが明らかであれば、アルファベットごとに分けられた備え付けのカタログから当該の写本を探し出す。②そこに記された「分類および番号」を確認する。③その分類に沿って分けられた書誌情報カードを探し出し、マイクロフィルムの番号を見つけ出す。④所定の閲覧申請紙に閲覧を希望のマイクロフィルムのタイトル、著者名、分類および番号、フィルム番号を記入し、担当者に渡す。⑤担当者が持ってきたフィルムは一本ずつ受け取り、マイクロリーダーで閲覧する。

手続き上は特に複雑ではない。しかしながら、カタログ、カードともに不完全なことが多く、③の段階に行き着くことが難しい。何故なら、目的のカードが見つからないことがあるからである。写本閲覧室の利用には特に制限はないため、エジプト国内外から大勢の閲覧者が訪れているのであろう。カタログもカードも角は磨り減り、破れかけているものも少なくない。中には不心得者がいるのか、カタログのページの一部を破いて持ち去ったり、カードを引き抜いて全く別の場所に差し込んでしまったり、持ち出してしまったりしているようで、目当てのカードが見つからないことがあるのである。目的のカードがなければ、マイクロフィルムの番号が分からず、フィルム閲覧の申請が出来ないということになる。今回、筆者が調べた20点あ

まりの写本の中にもカードが見当たらないものが1点あった。これは幸いにして複製フィルムが別分類で存在していたおかげで、無事に閲覧することが出来た。

また、閲覧室には写本マイクロフィルムのデータベース検索が可能なPCが設置されている。しかしこれは館内に設置されたPCのみで利用可能であることに加え、データ上にフィルム番号が入っていないものも多く、最終的にはカードを使って確認しなければならないという点では、カタログと大差はなかった。欧米の図書館が保有していない写本を多く所蔵しているだけに、目的のマイクロフィルムを閲覧できないということが有り得る状況が改善されることを強く望む。

フィルム番号を確認して閲覧を依頼した後にも困難はある。閲覧室のマイクロリーダーは10台ほど設置されているのだが、このうち支障なく作動し閲覧に耐えるものは3台ほどしかなかった。筆者は開館に合わせて写本閲覧室を訪れていたが、常に1人ないし2人は先にマイクロリーダーに向かっている閲覧者がいた。交通渋滞などで到着が遅れると利用可能なリーダーが占領されてしまい、フィルムを見ることが出来ないということもあった。そのようなときはその日の閲覧は諦め、翌日のフィルム閲覧に備えて丹念にカタログとカードによる検索を行った。

今回、国立図書館で閲覧した写本マイクロフィルムの主なものを挙げておく。複製したものについては【】でその内容を補足する。

イブン・サーイー著の13世紀末～14世紀初頭の年代記『抄本集成』(Tārikh Taymūr, no.597)、13世紀にバグダードにおいて「説教師」としても活躍したウラマー、イブン・アルジャウズィーが著し、当時のカリフ・ムスタディーに献呈した『カリフ・ムスタディーの治世における燦然たる光輝』(Bā, no.19788)【全275ページ】、同著者の年代記『正しき秩序・抄本』(Tārikh Mim, no.95)【11～13世紀に相当する部分20ページ】、同著者の説教集『ワアズとフトバにおける美質の源泉』(Taṣawwuf, no.2074)【全148ページ】、ハッダード・イスファハーニー著の『諸師事典』(Mustalah Hadith, no.26)【現存する全21ページ】、シラフィー著の『諸師集』(Tārikh no.2037)、イブン・ワースィル著『アイユブ家の事柄について憂慮からの解放』と知られる史料の別タイトル写本『カリフと王とスルターンに関する事柄の書』(Tārikh no.5319)などである。紙焼は最短で翌日仕上がりで安価であるが、CD-ROMは最短でも2日を要する上に、1ページ当たり1米ドルと、現地の物価を考えると非常に高額に設定されている。これは海外からの一時滞在者に対する価

格であることを補足しておく。エジプト国内の研究者および滞在許可書保有者であれば、4分の1程度になる。写本研ではCD-ROMへの複製は行っていないが、マイクロフィルムへは比較的安価(1メートル当たり7米ドル)で複製できるため、当初は同一写本であれば写本研で収集するつもりであった。しかし、後にも改めて触れるが、写本研で複製できるのではないかという希望があったため、国立図書館での複製以来はぎりぎりまで先延ばしにしていた。結局、筆者が滞在中に写本研は再開しなかったため、入手後の読み取りのし易さや劣化の心配がないことなどを総合的に判断し、複製できる点数は少なくなるもののCD-ROMへの焼付けを依頼した。結果的に収集した写本マイクロの点数が少なくなってしまったことが惜しまれる。

②アレクサンドリア図書館・写本センターおよび、稀覯本部門 Maktabat al-Iskandariya, Markaz al-Makhtūtāt, Maktabat lil-Nādira

写本研閉鎖の情報を得てから急遽調査先として加えた。“世界中の文献を収集することを目的とした”といわれる古代アレクサンドリア図書館を継ぐ大図書館として、ユネスコとエジプト政府が共同で一大図書館兼文化センターを建設した。

アレクサンドリア図書館(以下、Alex図書館)には11世紀のバグダードで著名な「説教師」であったハティーブ・アルバグダーディーの『伝承者集成』と、13世紀前後にエジプトで活躍したウラマーの人名事典『死亡者録補遺』の写本が所蔵されている。Alex図書館の写本センターの利点は、直接写本をみる事ができることである。国立図書館の写本閲覧室がそうであるように、写本保護のためマイクロフィルムを閲覧することが世界的にも一般化している中で、実物を手にとって閲覧できる機会は貴重である。

主な研究機関が閉館する金曜日を使ってアレクサンドリアへ移動した。Alex図書館はエジプトでは例外的に火曜日を休館日としている。通常の開館時間は11時から、金曜日・土曜日は午後3時から7時までとなっている。写本センターは通常の開館日と同様であるが、研究者用の閲覧室は金曜日・土曜日は閉室、日曜日は16時30分まで開室している。本来、修士課程以上の学生であることの英文の証明書が必要であるということであったが、その準備が間に合わず、国際学生証と昨年度の海外調査報告の英文HPをプリントアウトして持参し、こちらの事情を説明したところ、快く閲覧を許可していただいた。しかしながら、最大の目的であった写本は2点とも著者直筆の、特に貴重な文

献であるとして博物館に展示中であり、そのため閲覧は許可されなかった。現在、写本の状態にもよるが、一定の目安として16世紀以前の写本については現物の閲覧は許可していないということであった。

また、写本閲覧室が閉鎖中の18日と19日には稀観本部門にて調査を行った。同部門は一般閲覧部門とは異なり閉架式で、図書の利用、返却、複写についてもすべて司書を通して行う。ここではイブン・サーブニー著『完璧なるものの完成』（1957年イラクで発行された初版本）や、ムスタファー・ジャワード著の研究書『バグダード地誌』（1958年）、などを閲覧、一部の複写を依頼した。

Alex図書館の蔵書については、通常の開架閲覧本、稀観本、写本、マイクロフィルムなどもインターネット上で英語、フランス語、アラビア語で検索可能である。今回は訪問調査を予定していなかったため、十分な準備が間に合わなかったことが残念である。再度訪問する際には、事前に準備が出来るという点を活かして調査に臨みたい。

③フランス東洋考古学研究所Institut Français D'archéologie Orientale (以下、仏研)

コロニアルスタイルの瀟洒な建物で、旧大使館をそのまま研究所として利用しているということであった。短期利用である旨を説明し、パスポートと国際学生証と持参し、所定の申請書に必要事項を記入してから図書の閲覧を許可された。図書、雑誌いずれも閉架式で、閲覧に際しては司書に申請書を提出する。蔵書の検索は仏研の内外から可能である。

特に定期刊行物の蔵書に定評がある。閲覧には寛容であるが、複写が認められるのはその本全体の10%まで、あるいは一度に50ページ以下と厳密に線引きがなされている。雑誌論文であっても所定の範囲内では1本すべてを複写することは難しい。複写も職員に依頼するため、最短でも翌日受け取りとなる。数種類の雑誌、図書の閲覧をしたが、複写希望の部分が規定の範囲を超えてしまうため、今回は複写を諦めざるを得なかった。今回のような短期での利用ではあまり成果が得られないと感じた。

④カイロ国際ブックフェア Ma'rid al-Qāhira al-Duwalī lil-Kitāb (以下、ブックフェア)

アラブ圏最大のブックフェアであり、世界でも有数の規模である。昨年の実績では26カ国660社あまりの出版社や書店が参加した。

国立図書館やAlex図書館の出版部門、カイロ大学、

アインシャムス大学などの出版会なども含め、エジプト国内はもちろんアラブ諸国、それ以外からの参加も多い。今年は40周年記念企画として、あちらこちらにアラビア語圏の著名な作家の肖像画と略歴を記したパネルが設けられていた。総合展示会場では、参加各国が展示ブースを設置し、新刊や主要図書を紹介していた。この会場の入り口などにさまざまな言語で「ようこそ、カイロ国際ブックフェアへ」と書かれた看板が立てられていたが、その中に日本語もあった。ただし、アラビア語では母音uとoが同じ母音記号を用いるため、「カイロ」と書くべきところ「カイル」と表記されていた。それでもエジプトでは日本語学習熱は高まっているようで、昨年出版されたエジプト人の手になるアラビア語・日本語辞典が目にとまった。また、日本語学習用のPCソフトも見かけた。

近年アラビア語の書籍に関しても、少しずつインターネットでの購入が出来るようになってきている。しかしながらそれはアラブ諸国の出版物の中の、ごくごく一部分である。ブックフェアはマグリブや湾岸諸国から出版社・書店も多数参加しているため、アラブ諸国の出版状況を網羅的に知ることができる貴重な機会である。新刊の校訂本や研究書をチェックしつつ、古書店に絶版となっている書籍が並んでいないかを見て回った。ある書店で、国立図書館で閲覧した著者不明の写本『説教壇におけるフトバ集』と同じタイトルの書籍が目についた。よほど有名な書籍かと思って見ると、副題に近年のとある著名なウラマーの名前があり、中身はその人物のフトバを集めたものであった。他のウラマーの名前で編集された物も複数見かけたことから、フトバを集めた書籍としてはごく一般的なタイトルであるらしいことが分かる。今後、説教集の調査を進めるにあたっては、『説教壇におけるフトバ』というタイトルがひとつの手がかりとなるだろう。

今回、説教集を検討対象にすると決め、最初に入手した書籍はアフマド・ザキー・サフワ編集の『アラブのフトバ集』全3巻であった。1巻はイスラーム初期、2巻はウマイヤ朝期、3巻はアッバース朝前期に当てられ、歴史的にも著名なフトバを集めた説教集である。誰が行ったフトバで、何故それがよく知られるのかなどの理由も明記されている。書店主の話では、1960年代に出版されたものが最近再版されたのだということであった。また、複数の書店で自分の研究テーマ、時代などを伝えて参考になりそうな書籍を紹介してもらい、筆者未見の新旧の研究書を含め、複数の書籍を購入することができた。

⑤アラブ連盟大学写本研究所 Ma'had al-Makhtūtat al-'Arabiya

当初の予定では写本マイクロフィルムの閲覧、複写の中心と考えていた。しかしながら、1月初旬からの内部改装工事のため、閉鎖中であった。筆者が訪れたときにも職員はフィルムの閲覧、複写は出来ないが、カタログの閲覧だけはしてもよいということであった。複写がしたい旨を伝えると「2週間後からだ」と言うので、再開を急がせるためにも筆者は計3回写本研を訪れた。「ボクラ（明日）」が3日後になるのが普通といわれるエジプトで、やはり予告どおりには再開しなかった。ぎりぎりまで待ったが、筆者の滞在中には再開されなかったのが本当に残念である。しかしながら、新しく追加されたカタログをゆっくり調べることは出来た。これまで対象外として初めから除外していたのだが、改めてみると「説教集」と思いきタイトルの写本が相当数あることがわかった。中身は確認できなかったが、今後の史料収集に大いに役立つだろう。

4. 今後の研究計画と展望

今回の調査において、これまでに筆者が収集してきた史料を補う複数の文献を入手することができた。今後は、鋭意これらを読み進め、都市ごとにそれぞれの事例を検討していく。その結果は学会での口頭発表、学術雑誌への投稿論文として発表する。近いものとしては5月25日（日）日本中東学会第24回年次大会（至・千葉大学）において「バグダードにおけるマドラサの発展と変遷—ニザーミーヤ学院からムスタンシリーヤ学院まで」と題し、バグダードの教育施設、特に「説教」を行う場所のひとつでもあったマドラサに焦点を当て、その設立の目的や社会的・政治的背景、教育活動などの発展と展開について発表する予定である。

また、西洋史での説教研究の成果を視野に入れつつ

説教集についての検討を始めたい。まずは始めたばかりの説教集の収集を続けながら、その内容の傾向や著者であるウラマーたちにとっての位置づけについて明らかにしていく。これまで「説教師」の行動に重きをおいてきたが、今後は活動と言説の双方を比較できるように研究を進めるものとする。

注

1. 本報告書ではアラビア語makhtūtatに相当する訳語はすべて“写本”で統一する。アレクサンドリア図書館の日本語公式HPによれば「古文書博物館」「古文書センター」とあるが、混乱を避けるためそれぞれ「写本博物館」「写本センター」とした。また、Maktabat lil-Nādira/Rare Books Sectionは同HPでは「貴重文書図書館」となっているが、「稀覯本部門」とした。
2. 西洋史における説教研究の動向については、[大黒2006] [赤江2007] を参照。
3. [Maier1994] [Cole1991] などがある。

参考文献

- Berkey, J. P., *Popular Preaching and Religious Authority in the Medieval Islamic Near East*. Seattle, University of Washington Press., 2001.
- Cole, P. J., *The Preaching of the Crusades to Holy Land, 1095-1270*, Cambridge University Press, 1991.
- Maier, C. T., *Preaching the Crusades*, Cambridge University Press, 1994.
- Pedersen, J., “The Islamic Preacher: Wa‘iz, Mudhakkir, Qāss.” *Ignace Godziher Memorial Volume*. Budapest, vol.1., 1948.
- . *The Criticism of the Islamic Preacher. Die Welt des Islams*, n.s., 2., 1953.
- 赤江雄一「14世紀イングランドにおける説教師の図書館」『西洋史学』（日本西洋史学会）210号、2003年
- 大黒俊二『嘘と食欲』名古屋大学出版会、2006年。

むらやま さえこ／お茶の水女子大学大学院 比較社会文化学専攻 博士後期課程2年

【指導教員のコメント】

アラビア語の歴史史料は、著作当時から多くの写本が作成され、モスクやマドラサ（大学）などで所蔵・利用されていた。これらの一部は欧米などの図書館に購入・所蔵されているとはいえ、多くの未刊行写本が現地の図書館に所蔵されている。エジプトの国立図書館やシリアの国立アサド図書館では、長い期間をかけて、これらの写本の目録カードを作成し（手書きやタイプ打ち）、冊子体の写本目録も編纂されている。近年は、写本目録のデジタル化や写本自体のデジタル化も進められ、とりわけトルコではデジタル化事業が急速に進んでいる。

村山さんが今回の調査対象として訪問したエジプト国立図書館とアレクサンドリア図書館は、旧・新の図書館の状況を反映している。前者はエジプトを代表する図書館でありながらデジタル化が遅れている。とはいえ、私

がここを利用した1994年には、マイクロフィルムでの複製はわずか6カットしか許可されていなかったことを思い起こすとCD-Romでの入手ができるようになったことは隔世の感がある。他方、マイクロフィルム化やデジタル化がなされると、一般に写本の現物の閲覧ができなくなる。保存上やむをえないこととはいえ、写本の解読には、筆の流れが判読できる現物のほうが格段に読みやすいし、歴史の現場にさかのぼれるような感覚を味わうこともできる。

(人間文化創成科学研究科 教授 三浦 徹)